

初年次教育における COVID-19 への対応実態についての調査

基礎集計

初年次教育学会課題研究活動委員会

初年次教育における COVID-19 への対応実態についての調査 WG

《調査実施期間》2021年7月22日（木）～2021年8月20日（金）

《調査方法》Google フォームによるオンライン調査

《回答者（回答率）》121名（22.5%） *個人会員537名／2021年6月22日現在

A. 基本情報

1. 属性

あなた自身についておたずねします。複数の機関で勤務している場合は、その中で主たるものを1つ選んで回答してください。

問1. 主たる所属機関の設置種別を選択してください。

1. 国立（11名，9.1%）
2. 公立（8名，6.6%）
3. 私立（102名，84.3%）

問2. 主たる所属機関の種別を選択してください。大学と短期大学の併設校など、複数にまたがる場合は、ご自身の主に教育を担当されている機関として選択してください。

1. 大学院大学（3名，2.5%）
2. 四年制大学（専門職大学を含む）（106名，88.3%）
3. 短期大学（専門職短期大学を含む）（5名，4.2%）
4. 高等専門学校（0名，0%）
5. 専門学校（0名，0%）
6. その他（六年制大学（5名，4.2%），高校（1名，0.8%））

問3. 主な勤務地の都道府県を選択してください。

東京都（27名，22.3%），愛知県（11名，9.1%），石川県（10名，8.3%），大阪府（8名，6.6%）
北海道，埼玉県，京都府，広島県（6名，5%），千葉県（5名，4.1%） *5名以上のみ記載

問4. 主たる所属機関に在籍する学生の総数を選択してください。

1. 5000人以上（46名，38%）
2. 2000人～5000人未満（36名，29.8%）
3. 2000人未満（39名，32.2%）

問 5. 主たる所属機関における職種を選択してください。

1. 常勤教員 (108 名, 90%)
2. 非常勤教員 (2 名, 1.7%)
3. 職員 (教員以外の職種で非常勤含む) (10 名, 8.3%)

問 6. 専門分野・業務分野を選択してください。

1. 教員 (人文社会科学系) (65 名, 53.7%)
2. 教員 (理工系) (14 名, 11.6%)
3. 教員 (医療系) (11 名, 9.1%)
4. 教員 (教員養成系) (9 名, 7.4%)
5. 教員 (芸術・体育系) (2 名, 1.7%)
6. 教員 (その他) (8 名, 6.6%)
7. 職員 (管理・総務系) (2 名, 1.7%)
8. 職員 (教育・学生支援系) (9 名, 7.4%)
9. その他 (1 名, 0.8%)

問 7. 年代を選択してください。

1. 20 代 (0 名, 0%)
2. 30 代 (7 名, 5.9%)
3. 40 代 (35 名, 29.4%)
4. 50 代 (52 名, 43.7%)
5. 60 代 (25 名, 21%)
6. 70 代以上 (0 名, 0%)

問 8. 担当している科目について選択してください。あてはまるもの全てを選択してください。

1. 初年次教育科目を担当している (100 名, 82.6%)
2. 共通・教養科目を担当している (77 名, 63.6%)
3. 専門科目を担当している (75 名, 62%)
4. 科目を担当していない (9 名, 7.4%)

B. 学内での組織的な対応について

問 9. あなたの所属機関において、2021 年度前期の学生（特に新入生、新 2 年生）に対する対応措置として、どのようなことが行われましたか。あてはまるもの全てを選択してください。

1. 感染予防対策を施した自習室を確保した (73 名, 62.4%)
2. 図書館による貸出対応（貸出期間の延長、冊数の上限緩和、送料負担） (69 名, 59%)
3. 授業以外の場で、学習上の遅れを補うための対面での機会（TA による相談対応等）を提供した (29 名, 24.8%)
4. 遠隔授業を受けるための環境整備（ノート PC の貸与、WiFi ルーターの貸与など） (77 名, 65.8%)

5. 学生の事情に応じて遠隔での受講を可能にした (104名, 88.9%)
6. オンラインによる学習相談や学習支援(オンデマンド自習教材やオンライン講習会、学習相談)を提供した (66名, 56.4%)
7. 授業以外の場で、学生同士のつながりを確保するための機会(SNS やオンラインでやり取りする場)を提供した (47名, 40.2%)
8. 学生の身体的健康面に関する相談対応を強化した (40名, 34.2%)
9. 学生のメンタルヘルスに関する相談対応を強化した (53名, 45.3%)
10. 休学・留年に対する特別な措置(学費の延納・分納対応含む)を行った (37名, 31.6%)
11. 経済面に関する相談対応を強化した (56名, 47.9%)
12. その他 (4名, 3.6%)

問 10. あなたの所属機関において、機関の方針として、コロナ禍以降の各学期(2020年度前期・後期・2021年度前期)の初年次教育は、原則としてどのような形式で行われましたか。それぞれの学期についてお答えください。

	遠隔授業で実施	対面授業と遠隔授業を併用して実施	対面授業で実施
2020年度前期(120名)	89名(74.2%)	30名(25.0%)	1名(0.8%)
2020年度後期(118名)	26名(22.0%)	79名(66.9%)	13名(11.0%)
2021年度前期(121名)	5名(4.1%)	97名(80.2%)	19名(15.7%)

C. 初年次教育の特徴について

問 11. 2021年度前期に担当された初年次教育科目は、どのような内容のものですか。あてはまるもの全てを選択してください。

1. ライティング(レポートの書き方、文章表現等) (83名, 74.1%)
2. 学習技術(ノートの取り方、本の読み方等) (69名, 61.6%)
3. 情報技術(文献検索、情報リテラシー等) (60名, 53.6%)
4. プレゼンテーション (65名, 58%)
5. ソーシャルスキル(人とのかかわり方、コミュニケーション・スキル等) (58名, 51.8%)
6. キャリアに関する内容 (49名, 43.8%)
7. 自校教育 (27名, 24.1%)
8. 高校までに身につけているべき内容の確認・補習 (23名, 20.5%)
9. 研究・調査方法などリサーチスキル (43名, 38.4%)
10. その他 (6名, 5.4%)

問 12. 2021年度前期に担当された初年次教育科目は、どのような方式で行われましたか。最もあてはまるもの1つを選択してください。

1. 同時双方向型授業 (13名, 11.6%)

2. オンデマンド型授業（動画や音声による配信）（3名, 2.7%）
3. オンデマンド型授業（資料の配信）（2名, 1.8%）
4. 同時双方向型とオンデマンド型の混合（10名, 8.9%）
5. ハイブリッド型授業（対面授業と遠隔授業の混合）（59名, 52.7%）
6. 対面授業のみ（25名, 22.3%）

問 13. 2021 年度前期の初年次教育では、どのような教育方法を実施しましたか。以下の項目それぞれについて、実施の有無とコロナ禍以前と比べた頻度の増減についてもお答えください。

	実施した (増えた)	実施した (変化なし)	実施した (減った)	以前は実施し ていたが、実 施しなかった	以前から実施 していない
1.ペアワーク(107名)	5名(4.7%)	28名(26.2%)	28名(26.2%)	17名(15.9%)	29名(27.1%)
2.グループワーク(112名)	15名(13.4%)	41名(36.6%)	36名(32.1%)	15名(13.4%)	5名(4.5%)
3.ディスカッション(110名)	11名(10.0%)	35名(31.8%)	38名(34.5%)	16名(14.5%)	10名(9.1%)
4.プレゼンテーション(111名)	12名(10.8%)	43名(38.7%)	27名(24.3%)	14名(12.6%)	15名(13.5%)

問 14. 2021 年度前期の初年次教育では、学生との双方向性の確保や提出物等へのフィードバックはどのように行いましたか。以下の項目それぞれについて、実施頻度の観点からお答えください。

1. 授業中の質問に対する回答・フィードバック
よく行った(48名, 42.9%)・ある程度行った(55名, 49.1%)
あまり行っていない(8名, 7.1%)・行っていない(1名, 0.9%)
2. 学期中の課題・提出物に対する返却・フィードバック
よく行った(47名, 42.7%)・ある程度行った(53名, 48.2%)
あまり行っていない(8名, 7.3%)・行っていない(2名, 1.8%)
3. 期末課題に対する返却・フィードバック
行った(行う予定)(67名, 61.5%)・行わなかった(行う予定はない)(42名, 38.5%)
4. 採点基準を明示し、ルーブリックを活用した
行った(行う予定)(60名, 53.6%)・行わなかった(行う予定はない)(52名, 46.4%)

問 15. コロナ禍における初年次教育を実施して、学生の授業や課題に対する取組・姿勢をどのように感じていますか。以下の項目それぞれについて、コロナ禍以前と比べた変化の観点からお答えください。

	良くなった	変化なし	悪くなった	わからない
1.授業全体に対する意欲・積極性(114名)	27名(23.7%)	50名(43.9%)	25名(21.9%)	12名(10.5%)
2.授業外で行う課題に対する意欲・積極性(114名)	34名(29.8%)	49名(43.0%)	16名(14.0%)	15名(13.2%)
3.グループワークやディスカッションなど 学生同士のやり取りに対する意欲・積極性(114名)	31名(27.2%)	42名(36.8%)	23名(20.2%)	18名(15.8%)

4.質問や意見など教員とのやり取りに対する意欲・積極性(114名)	23名(20.2%)	59名(51.8%)	22名(19.3%)	10名(8.8%)
-----------------------------------	------------	------------	------------	-----------

問 16. コロナ禍における初年次教育を実施して、学生のスキルや技術等の獲得度をどのように感じていますか。以下の項目それぞれについて、コロナ禍以前と比べた変化の観点からお答えください。

	高くなった	変化なし	低くなった	わからない
1.大学（学業面）への適応度(113名)	21名(18.6%)	39名(34.5%)	37名(32.7%)	16名(14.2%)
2.大学（友達づくりなど人間関係面）への適応度(112名)	9名(8.0%)	17名(15.2%)	72名(64.3%)	14名(12.5%)
3.学習目標の明確化(113名)	17名(15.0%)	71名(62.8%)	10名(8.8%)	15名(13.3%)
4.将来目標の明確化(113名)	10名(8.8%)	64名(56.6%)	15名(13.3%)	24名(21.2%)
5.基礎的な学力(113名)	9名(8.0%)	71名(62.8%)	17名(15.0%)	16名(14.2%)
6.学習技術（ノートのとおり方、本の読み方等）(113名)	8名(7.1%)	58名(51.3%)	25名(22.1%)	22名(19.5%)
7.情報技術（文献検索、情報リテラシー等）(112名)	31名(27.7%)	54名(48.2%)	14名(12.5%)	13名(11.6%)
8.ライティングスキル（レポートの書き方、文章表現等）(113名)	15名(13.3%)	67名(59.3%)	24名(21.2%)	7名(6.2%)
9.プレゼンテーションスキル(113名)	18名(15.9%)	61名(54.0%)	11名(9.7%)	23名(20.4%)
10.コミュニケーションスキル（ディスカッション等）(113名)	6名(5.3%)	57名(50.4%)	25名(22.1%)	25名(22.1%)

問 17. コロナ禍における初年次教育は、コロナ禍以前と比べてどの程度うまくいったと感じていますか。以下、それぞれについてお答えください。

	うまくいった	ある程度うまくいった	あまりうまくいかなかった	うまくいかなかった
1.コロナ禍以前と比べて、2020年度前期は(111名)	5名(4.5%)	47名(42.3%)	44名(39.6%)	15名(13.5%)
2.コロナ禍以前と比べて、2020年度後期は(110名)	7名(6.4%)	66名(60.0%)	32名(29.1%)	5名(4.5%)
3.コロナ禍以前と比べて、2021年度前期は(114名)	18名(15.8%)	76名(66.7%)	18名(15.8%)	2名(1.8%)

問 18. 初年次生に対する遠隔授業を活用した教育にあたっての利点（メリット）はどのようなことだと思われるか。あてはまるものすべてを選択してください。

1. 自分のペースで授業できる (80名, 67.2%)
2. 場所や時間にとらわれず授業できる (91名, 76.5%)
3. 学生の学習時間や学習量が増える (38名, 31.9%)

4. 教材や資料の共有がしやすい (76名, 63.9%)
5. ICTを活用する能力が高まる (80名, 67.2%)
6. 動画や音声の組み合わせなど様々な工夫ができる (47名, 39.5%)
7. チャットなどで学生の反応を把握しやすくなる (43名, 36.1%)
8. LMS等を通じて、課題の提示や提出がしやすくなる (69名, 58.0%)
9. LMS等を通じて、課題の採点やフィードバックがしやすくなる (57名, 47.9%)
10. 一度作成したオンデマンド教材を利活用できる (61名, 51.3%)
11. 特になし (0名, 0.0%)
12. その他 (6名, 4.8%)

- ・ コミュニケーションが不得意な学生でも発言(発信)ができるようになった
- ・ 遠隔地にいる外部講師やゲストを呼びやすくなった
- ・ 講義を聞いて少人数で話し合いをする形式の授業で、講義部分をオンデマンド配信に置き換えたところ、理解度が高まり、真摯な取り組みも増え、話し合いでのコメントやレポートの質が格段に高まった。ZOOMのブレイクアウト機能を活用して、話し合いのグループの組み換えがしやすく、ワークショップ型授業の教育効果が高まった
- ・ 特別な支援を必要としている学生と留学生に対して、学生も教員も交流を深めることができた
- ・ 後から録画を視聴できる
- ・ 録画を併用すると欠席者への対応が楽になる

問 19. 初年次生に対する遠隔授業を活用した教育にあたっての問題点(デメリット)はどのようなことだと思われますか。あてはまるものすべてを選択してください。

1. 授業準備に時間が取られる (79名, 66.4%)
2. 学生にどの程度の課題を出せばよいか分からない (26名, 21.8%)
3. 学生の出欠管理や課題提出状況を把握するのに手間がかかる (40名, 33.6%)
4. 学生の反応が分かりにくい (97名, 81.5%)
5. 学生との授業外でのコミュニケーションがとりにくい (87名, 73.1%)
6. 学生へのフィードバックに時間がかかる (41名, 34.5%)
7. 学生の通信環境のバラツキへの対応が難しい (76名, 63.9%)
8. 学生の指導に時間が取られる (29名, 24.4%)
9. 学生のICTやレポート作成などのスキルが不十分である (40名, 33.6%)
10. 期待する学習成果があがらない (26名, 21.8%)
11. 学生の理解度・修得度が把握しにくい (49名, 41.2%)
12. 試験や成績評価を行うことが難しい (26名, 21.8%)
13. 教員間での連絡・連携が取りにくい (21名, 17.6%)
14. 遠隔授業に馴染めない (7名, 5.9%)
15. 遠隔授業は心身の負担が大きい (22名, 18.5%)
16. 特になし (0名, 0.0%)
17. その他 (10名, 8.0%)

- ・ パソコン起動やLanアカウントの入力等の初歩的な内容でつまづく学生が多くなった気がします
- ・ 授業を「期限までに課題をこなすチャレンジ」にしてしまう学生の場合、授業を積み重ねて到達目標を達成するというに至らない。／学生には自分の都合の良い時間に受講できるというメリットもあるが、自己管理の苦手な

学生にとっては負担になる。／学生には自分の都合の良い時間に受講できるというメリットもあるが、学生個々の都合によって昼夜平日休日問わずに質問等を送信することが可能ということにもなるため、教員は休みが取れないことになり精神的に追い詰められるのに対し、学生にとっては投げた質問に対してフィードバックが届くまでのタイムラグが不満要素になる。

- ・ 遠隔授業に馴染めない「学生」と「教員」は一定数、存在すると思います。また、遠隔授業は心身の負担が大きい「学生」と「教員」は一定数、存在すると思います。
- ・ 授業を通じて学生同士が友人を作る場としても期待していたが、授業前後の雑談ができなくなり、人間関係を構築しづらかったのではないか
- ・ 宿題を一人ずつに返却するのが面倒、ブレイクアウトしても学生同士がコミュニケーションしてくれない
- ・ クラスメイトを作りにくい
- ・ 学生間の五感を活用したトータルな人間的交流ができない
- ・ 課題を提出することだけに特化した資料読みたい・早送り動画閲覧をする学生が半数以上を占め、熱心に教材を作成して授業を丁寧にすればするほど、いかにして学ばないで課題を解けるかという「学びからの逃避技術」を学生が巧みに身につけて行っていること。つまり、大学で学んでいるのが「学ぶことからの逃避技術」となってしまうこと。
- ・ サボリ癖がつく、聞き流し癖がつく
- ・ やる学生とやらない学生の格差が広がった

D. 自由記述

問 20. コロナ禍での初年次教育の実践において、どのような工夫をされましたか。うまくいったと感じたことや、うまくいかなかったことについて、ご自由にお書きください。(80件)

- ・ 21年度については、ハイブリックス型での提供という面では工夫したが、それ以外では特に工夫が必要ではなかった。20年度については、担当者により提供内容がばらばらな部分があった初年次演習の内容について、資料検索と文章作成に関してオンラインで統一した内容を5回分作成して、担当教員間での授業内容が統一されたことで、従来からの課題が克服できた。またこの統一コンテンツを21年度も授業内ないし予習資料として用いることで、方法は多様であっても学ぶ内容について統一を図ることができた。
- ・ Classroomなどの機能を使うことで、課題のやり取りが楽になり、学生の学習時間を増やせたと思う。ZOOMやMeetで簡便に面談指導を行えた。
- ・ 新しいtoolを使いこなすまでには慣れが必要
- ・ 2020年度前期は緊急事態宣言により急に遠隔授業になったが、ICTスキルが十分ではないままで授業を実施しなければいけなかった。そのような状況の中、授業の質がどれほどまで対面授業のものに近づいていったか甚だ疑問であり、反省すべき点である。対面授業ではペアワークやグループディスカッションを実施していた。遠隔授業において、学生への効果的な資料提示の方法、また双方向のやり取りができないため、その部分のスキルが必要である。
- ・ オンラインでのゼミナールは、全員に必ず発言の機会を与えた。そのことによってゼミ内で凹凸なく学生のことを知ることができた。
- ・ 対面でしたが、大学の所在地が厳しい状況でしたので、事前の動画での学び（反転授業に近いもの）を義務付け、対面での時間を短くしました。対面だからこそ、かえってグループワークが行いにくい状況でした（授業時間外で

の（オンラインでの）グループワークは初年次ということもあり回避しました）。

- ・ 無駄話をする時間を増やした
- ・ 従来どおり、対面実習として実施したため、感染防止対策として学生にフェイスシールドを着用させたので、グループワークの際の発言が聴き取りにくかった。
- ・ 教材の管理が教員も学生もうまくいった。学生は手書きより PC 入力の方が充実した内容を回答できていた。画面オフにしている学生がほとんどで個人の様子がわからない。
- ・ ハイフレックス型授業は言うまでもなく、これまで以上に、グループワークを行う意図や授業のねらいなど、必要性ややっていることの意味など、メタ的な意識を喚起するように促した。
- ・ コロナが広がり始めた 2020 年 3 月に、ZOOM を使ったワークショップの専門家を招いての講習会を複数回開催し、ブレイクアウトルームを使ったコミュニケーションの取り方について部局内の教員に複数回の研修を行った。これにより、全学必修の初年次教育科目の担当者約 30 名が事前にオンライン授業に備えることができた。授業開始後は、毎回の授業後、担当教員が集まる振り返り会を開催し、オンライン授業での不安・問題点を共有し、その場で対策を検討することができた。インターネット回線がつかなくなかった場合の授業プランと教材をあらかじめ教員間で共有したり、映像コンテンツ作成に強い教員がオンデマンド動画を作成したりと、組織として各教員の強みを生かしながら機動力を持って対応できたことで、対面授業のときよりも学生の学習の質や学生からの授業への評価が高かったと感じている。
- ・ 対面授業とオンラインツールを組み合わせた取り組みができる。オンラインでゲストと参加が容易になった。
- ・ オンライン授業時に、学生が快くカメラオンにできる環境作りを心がけた。
- ・ 学生同士のコミュニケーション、友好関係を築くこと
- ・ 読解力別にクラス編成をし、能力に応じた授業実戦を試みた。
- ・ LINE のオープンチャットを使い、授業外での教員、学生のコミュニケーションを取りやすくした Zoom のブレイクアウトルームを使って学生だけの少人数グループの話し合いを頻繁に取り入れた ブレイクアウトルームを巡回し、指導する際の介入の程度が難しい。初年次の教養科目では、専門への学習意欲につながるように、身近な社会問題を絡めながら、専門分野の知識の有効性を説明することを心掛け、多くの学生が、専門教育へのモチベーションを高めることができた。
- ・ グループワークで密を避けるため、Google Jamboard を利用したが、対面では発言ができない学生が積極的に書き込むなどの効果が見られた。・ 代替授業のコンテンツとして、スライドに音声解説を付けて配信したが、学生の反応が分からないので、改善のための情報が得られにくかった。
- ・ 私が担当するライティング科目では、ほとんどの学生がきちんと教科書を読み、課題を提出することです。また、積極的に質問を出し、それにきちんと答えることでほかの学生へもいい影響を与えられていると思います。
- ・ 実学（実習）を主に担当しているのでコロナ禍では基本的にできませんでした
- ・ 基礎演習にてグループワークや共有スライドを活用してアクティブにした
- ・ ライティング科目を担当しています。必修の当該科目（全 25 クラス）を複数の教員で担当し、毎回、同一内容、同一教材で実施しました。その際、教員間で教材の相互提供を行って教材準備にかかる負担軽減を図りました。その結果、学年全体で目標基準を満たす学生が約 80% になりました（例年の達成率は約 90% なので、約 10% のマイナスです）。未達の約 20% の学生については学習意欲の著しい低下が見られましたが、十分な対応ができませんでした。その原因として、当該科目で行った方法では、毎時の授業で配布する「資料」「解説動画」などを正しく読んだりうまく活用したりするという初歩的な技能が不足している学生には有益でなかったととらえています。遠隔授業を実施する上で、読み書きのリテラシーが不足している学生に対して、いかに学習意欲を喚起させ学習の仕方を身につけさせるか、大きな問題です。

- ・ 非同期型の遠隔授業は、LMS 上で取り組むため、学生の取組状況が逐一把握でき、取組状況が遅い学生に取組を促す連絡を送ったところ、取組忘れや漏れなどを未然に防ぐことができました。
- ・ 工夫したこと：LMS を通した事務連絡を頻繁に行い、課題提出・期限等の周知をコロナ禍以前よりも積極的に図った。うまくいかなかったこと：学校から指定されている通信手段（LMS による通知、学内メールアドレス等）を用いて頻繁に通知を行っても、見ない学生には伝わらなかったこと。／学校から指定されている通信手段（LMS による通知、学内メールアドレス等）を用いて通知を頻繁に行うことが、他の科目や事務からの連絡等も含めたトラフィックの増大につながり、必要な通知が逆に学生の目に入りにくくなったこと。
- ・ 動画講義作成において、一人で講義するのではなく、聞き手と話し手と 2 名で作成した。これにより、飽きない、聴きやすい動画にある程度できた。
- ・ LMS だけでなく LINE グループも活用し、オンラインでの「おしゃべりランチ会」などを企画したところ、昨年は有効に機能した。今年は入学式やオリエンテーションを対面で実施できたので、あまり「公式なオンライン休み時間」への需要はなかった。また先輩と接する機会を設けるよう心掛けた。オンライン授業についていけず、語学や PC 系の授業についていけなくなる学生が散見されたのは課題である。
- ・ 遠隔会議システム（Teamas）を活用したグループ活動はうまくいった。ポートフォリオシステムでの学修状況把握は有効だった。WebClass での資料提供、一斉連絡メール、質問受付は効果的であった。2020 年度前期は学生と一度も会えず、コミュニケーションに問題を残した。
- ・ チャットの活用、オンライン指導、写真・動画共有による大学案内、友だちづくりのためのバースデー自己紹介など
- ・ オンライン・リアルタイム授業における学生の反応が把握しかねたのだが、チャットや Zoom の反応ボタンなどを活用することで、想定以上に把握が可能となった。一方、メール連絡はきわめて稚拙な表現しかできないことも、よく把握できた。ツールによって反応が大きく異なることを実感できたことは、今後の教育実践において大きな収穫だった。
- ・ チャット機能を使うことで、対面のディスカッションよりもむしろ学生が自分の意見を表出するハードルを下げることができた。
- ・ 学生とのコミュニケーションに力を入れた。
- ・ 自宅受講生用に面接授業のオンデマンド配信を行った。面接授業に受講者には自宅でも復習ができると好評であったが、自宅受講生からは配信専用の動画の希望が別途あった。
- ・ 工夫内容：・教室の密回避のため、1 クラスを 2 グループに分けてローテーションで対面授業を行った。・対面授業ができない期間は同時双方向とし、1 年生のために同時双方向時に使用する機能（ミュート解除、チャット、リアクション、ブレイクアウトルーム移動）に慣れるためだけの授業回を設けた。・対面や同時双方向の授業では、様々な事情でリアルタイム参加できない学生のためにオンデマンドでの説明も LMS にアップし、代替課題を準備した。
（問 12 の「ハイブリッド授業」は、本学の初年次教育の場合、対面授業との同時配信ではなく、対面授業に出てこられなかった学生はオンデマンド型で受講するという意味。）。うまくいったこと：・オンデマンド型授業では、講義動画の再生数から何度も見返して確認している学生がいることが確認でき、学生からも課題を行う際の復習に便利だと好評であった。・大学に不応だが自宅でも学修できる学生は、オンデマンドという選択肢が常に用意されている分、継続履修しやすかったものと思われる。・授業外での教員→学生、学生→教員の連絡がしやすく、きめ細かなサポートができた。うまくいかなかったこと：・ローテーションでの対面授業は、グループでのプレゼンテーションがメインになる学期には向かなかった。対面授業を行わない週は LMS 上の掲示板でグループの話し合いをすることになり、半分ほどの学生が参加しない事態となって、不合格者が急増した。・2020 年度前期は適切な課題量や講義動画の長さがわからず、学生にとって非常に大きな負担となったようだった。

- ・ 初年次であること、リモートであることから、できるだけグループワークを取り入れて、飽きさせない、大学（大学生）を実感してもらうために講義内容を工夫することに注力した。
- ・ Zoom の分室機能でグループ学習をさせた。各グループの様子がわからないのが欠点。
- ・ 昨年度(2020 年度)は、まだコロナ禍での対応に上層部が不慣れで問題なく以前からの LMS を活用していて順調だったが、今年度(2021 年度)より、新入生の慣れを問題にされ、LMS ではない本学独自システム以外の利用をやめさせられた。組織にも依存するが、遠隔授業などに慣れていない教員に合わせさせられ、学生達への対応に制限がかけられる。
- ・ ライティングの課題では、Google classroom を使うことでレポートの添削がしやすかった。(コメントの流用・コピーが可能)
- ・ 工夫して学期末に共通科目の全クラスで共通試験を行い、細かな問題はあるもののある程度うまく行ったと思います。
- ・ 所属大学の初年次教育のためのゼミは、実施内容は決まっておりますが、教材や実施方法は担当教員に任されています。2021 年度このゼミは原則として対面で実施されましたが、その他の講義科目の対面は全てで実施されたわけではなく、学生同士の接点は多くないことが想定されておりました。・そこで、対面であるこのゼミでは、専門科目に関わるテキストなどを教材に自身の専攻への関心を高めながら、文章要約やレポート作成についてグループワークやディスカッションに時間を多くとりました。また、対面でなければできないこととして、ストアオペレーションをテーマにグループ分けをして学外店舗へ視察調査を行いました。・全体的には、仲間意識を醸成しつつ、学び(自分の専攻)への関心を引き出せたと思います。原則対面でありましたが、保護者と相談の上で遠隔参加も可能としたため、対面へ参加しない学生へ同じ内容を提供できないことがありました。また、対面に参加しない学生について、感染不安なのか、実際には意欲がないのか(大学へ来ることが億劫)、見極めることが困難でした。
- ・ 入学直後の学生間のコミュニケーションを促すために自己紹介の時間を数回設けるようにした。マスク着用下でお互いの表情が読み取れないことことから顔写真を提示しながらの自己紹介なども取り入れた。入学直後の学生に対しては学内での交流の時間が制限されていたこともあり、授業後の学生のアンケートからは肯定的な意見が多かった。 オンデマンド授業と対面授業の併用により授業を進行したため、オンデマンド授業での課題を対面授業で使用するなどの工夫を行った。 オンデマンド授業課題への取り組み内容はコロナ禍前の対面授業よりも良い内容も多く、他の学生の考えを全体に提示するという点では対面授業よりも上手かった点である。上手いかなかった点は、学生間のコミュニケーションが十分にはかれなかった点である。授業実施にあたり座席指定を行うことが大学の方針であったため、授業時間を利用してのコミュニケーションの促進は困難であった。
- ・ テキストを用いた。2種の教材を用意し、1種目はテキストの該当範囲のサーベイと発展内容をまとめたもの。詳しいため、自習もできる。2種目は動画スライドと動画、詳しい1種目の資料を口頭で説明するためのスライドを作成し、授業ではこちらを見せながら、動画へのリンク、外部インターネット資料のリンクを活用して解説をした。反転学習を取り入れた講義授業。授業中はアンケートをとってその結果を即座見せるといった形で、すでに入れてきた知識に対して賛否が分かれる設問をだした。
- ・ 課題の量を減らす代わりに、細かく提出・チェック・返却を行うことで学生の参加度・意欲度は高まったように思われる。他方、ICT 機器の使用の苦手な学生への対処は、オンラインのため従来以上に労力を割かれた。
- ・ グループワークやディスカッション、プレゼンテーションの機会を十分に提供できなかった。
- ・ 【うまく行ったこと】授業時間ごとに書かせていた振り返りを LMS にできた。コロナ禍前は LMS にすると提出率が下がる（授業が終わるやいなや、その授業のことは学生の頭から抜けてしまう）ために、授業時間の最後に手書きさせていた。しかし、LMS を使うのが当たり前になり、対面授業の振り返りも LMS に授業時間外に書かせることに成功した。授業時間外に書くことになることで、学生によってはかなり長文の振り返りを書いてくれるよう

になった。また、手書きからデジタルデータとなり、今後振り返りを分析するような機会があれば活用しやすくなったと思う。【うまく行かなかったこと】オンラインで学生同士で話し合いをさせることは難しい。まず、初年次科目は当然全員初対面同士である。そこから「初対面」→「顔見知り」→「気安く話せる仲」へという人間関係作りはオンラインでは容易ではない。また、対面なら、隣のペアやグループが話し合っているのを見れば、おのずと話し合うようになる。しかし、ブレイクアウトでは他のペアやグループの状態はわからない。そして、誰も顔出しをしない、誰もミュートをオフにしない、真っ暗で誰も何も話さないという状況が続く。ワーク（課題）を与えて結果を求めたとしても、結局一部の学生が作成したものをグループの成果物として出すことになり、学生側にも不満が残る。学生自身からも「対面の方が話しやすい」という声が多く聞かれる。

- 2020年度前期はZoomでの双方向授業だったが、ブレイクアウトセッションを活用して、なるべくディスカッションさせるように工夫した。学生にとっては、オンラインだとしても同級生と話す数少ない機会であったので、効果的だったようである。ただし、教員は個別にルームに参加しないといけなかったので、討議の様子を十分に把握できなかった。2021年度後期、2021年前期は対面を主とした授業であったので、距離を取りながらではあるが多方面でのグループ活動を行わせた。こちらの方が学生の様子を把握しやすかった。ただし、マスク越しなので、顔が十分に覚えられないのが問題だと思う。
- 可能な限り対面授業できるように工夫した。
- 学生によっては、遠隔授業の方が質問をしやすい、発表をしやすい学生が一定数いたと思います。そうした中、リモート方式での報告は、一部の学生にとっては、面接型の授業よりうまくいったと思います。また、コロナ禍でアクティブ・ラーニングを実施できない部分があったので、用紙に書いて見せるという方法（これもグレーですが、できるだけ触らないように注意しましたが）を実施しましたが、これはこれで好評でした。また、googleドキュメントやgoogleプレゼンテーションを用いたワークショップなども実施しました。これは、紙ベースよりもスムーズに実施できました。（最後にこのアンケートについて記載する欄がないため、アンケートについて、1）未記入の解答が一部ありますが、2021年前期はたまたま初年次教育を担当しておりません（2020年前期・後期、2021年後期は担当しています）。2）問15および問16で「わからない」を選択したのは、全体的にみて、遠隔授業の方が、「非常に良くなった」もしくは「高くなった」学生と、極端に「悪くなった」もしくは「低くなった」学生がいたと感じましたことから、何とも言えないを選択しました）
- 遠隔授業やLMSを利用する教員が多いため、課題の適切な量がわかりにくく、学生の負担が大きくなってしまったことがあった。
- SAに授業開始時・終了時に挨拶してもらった他、要所で発言してもらった結果、明るい雰囲気が進められた。また、「学生どうして話し合える数少ない（or唯一の）授業なので嬉しい」との声を聞くことができた。
- 小学校教員養成課程の「外国語」という授業では、90名を超える受講者数であったが、学生の授業でのマネジメントがうまくいき、手応えを感じている。理由としては、毎時授業の始めに授業での学習目標の提示、授業内容については、テキストの内容に準じたものをスライドで作成、提示し、授業の最後にはGoogle Formsで授業における理解度と満足度を10段階で自己評価してもらっていた。授業では、学生自らが自分でブレイクアウトルームでお互いの模擬授業を視聴し合い、意見交換をできる場を創出できたことにあると考える。また、学生自らが毎時間、自己評価を行うことで、自分の学びへのコミットメントやエンゲージメントを高めることができたものと考えている。ただ、そのようにうまくいった授業でも、新しいICTのツールの使用に関して、学生の理解度や習熟度によって、満足度が大きく減少した回もあり、どのような形で受けとめられているかについても参考になった。使用したツールは、MindmeisterとFlipgridである。教員側のICTツールの使用方法に関する理解度、習熟度、操作方法、使用させるタイミング、使用時間についても考えさせられた。
- Zoomと対面の混合。Zoomについてはブレイクアウトルームなどを使い、グループワークを実施し、その後全体共

有を試みた。学生の反応も全体ではコメントしにくい、ブレイクアウトにして少人数にすると意見も出しやすく、メンバー間の親密度も増すととの反応があった。

- 最も苦労した点は、学生の学修の様子や成果の把握です。特に授業中の様子を把握できなかった点を不満に感じています。画面オンにさせたくても、何らかの事情を訴えられたり、全く無反応で受講されると、こちらから対応することも限られるので、困りました。自前の学修ポートフォリオのための学修シートを使用していますが、これに関するライティング力や記述量、質的な向上は、積極的に取り組んだ学生には、オンライン上でも鍛錬の場を与えることができ、効果が出ました。教員にも自宅で授業を希望する人が増えて、教員間の連携や情報共有などにも多少問題がありました。対面を推奨したい授業でも、自宅から授業を行う教員が連続するコマにいと、影響を受けてしまいました。
- できるだけ共有する教材（PPT）をわかり易く作成した。学生が画面に集中でき、しかも重要な部分は、繰り返し説明ができるので理解度が上がったものと思われる。
- 授業時間を分単位で、計画した。
- 「初年次セミナー」という1年次・春学期・必修の授業において、SAに依頼し、課題の内容や提出期限の周知徹底に加え、遅刻や欠席、課題の未提出がみられる学生への声かけなどを、LINEやメールでこまめに行ってもらいました。4月は、対面でスタートしましたが、4月下旬の4回目からオンラインに切り替わったこともあり、このような手を打った次第です。そうした対応の結果、ほぼ全員が単位を修得できましたが、秋学期に向けて不安の残る学生が少なくありません。
- 初期に交流活動（関係性の構築のため）を行った
- 日本語表現教育のオンライン遠隔授業で使用するSLIDE資料の中に、思考や表現の過程を可視化するための図示を多用することによって、学生の理解度が向上した。
- LMSの活用度合いが飛躍的に高まった。オンデマンド講義動画を作成し、それを学生が自由に視聴できるようにした。学生のネットワーク環境の問題もあり、リアルタイムのオンライン授業よりオンデマンド型授業にしがちだった。
- 初年次教育においてオンライン授業は対面授業には敵わないこと。
- 通常も実施していたが、提出された課題には少し長めのコメントを付してフィードバックした。・大学から座席指定を求められたため、グループを移動することは難しい。そのため、ペアやグループで話し合ったことを受講者全員で共有できる時間を増やした。
- できるだけ、LMSでこまめな連絡を入れるようにした。学生の反応は悪くなかったと思う。
- 基本的な学習事項はオンデマンド型（動画）で提示し、実践的な課題とフィードバックはzoomなどで双方向授業としたため、効率的な指導ができた。しかし、学生は基礎学力や習熟度により、二極化した。成績上位層は着実にスキルを身につけることができた。一方、自律学習が身につけていない学生は、どんどん取り残されてしまい、状況が把握しにくかったため単位を落とす学生が一定数存在した。
- ○まずはお互いの顔がわかる形式（ビデオ双方向）で始め、安心感の確保に努めた。×初年次教育科目はできるだけ対面での実施に努めたが、どうしても学修技術習得の低下を招いたように思われる（人文系であるため書籍ベースでのリサーチが必要だが、遠隔期間があり、その時間が十分にとれなかった）。
- オンデマンドの授業では、授業時間中にZoomを開けっ放しにする、何でも書き込んで良い質問箱を設置するなど、学生とのコミュニケーションを維持しようとしてきました。結果としては、Zoomのような直接「質問する」形式より、テキストベースでの質問のほうが学生の利用率は高かったものの、直接話しにくることを楽しみにしてくれた学生もおり、両者はあまり重ならなかった（質問箱を利用する学生とZoomに来る学生が違った）ので、学生によって利用しやすいコミュニケーションが異なるのかなと思いました。

- ・ 教員と学生の繋がりを意識して、授業序盤から積極的に学生に話しかけることで、遠隔となった場合にも信頼関係を保てたのではないかと考えます。授業終了時に「この授業で友達が増えた」「大学に對面授業を望む」「毎週のこの授業が楽しみだった」という発言を聞いて、良い授業ができたかなと感じました。
- ・ 2020 年前期はオリエンテーション後すぐに遠隔に切り替わり横の繋がりが薄いことを複数の学生が訴えていたため、クラスルームやグループ LINE、Google チャット等でコミュニケーションを図り、チューターグループ間で連帯感を保てるよう工夫した。しかし SNS では取れていたように思えたコミュニケーションが対面で同じようにできたかという点、やはり差異があったようで、後期に對面授業でグループワークをした際になかなかうまくいかなかった。
- ・ グループ学習は原則、顔出しで実施
- ・ クラスメイトとの横のつながりを作ることができるように、グループワークなどを増やした。その効果についてはまだ検証できていない。
- ・ できる限り少人数授業を実施した
- ・ うまくいったことは、オンライン授業で、前回のリフレクションシートを本時の授業で取り上げ、教員が読み上げたこと。他の学生の意見が活字として見えたことと、教員のコメントで自分の意見との違いだけではなく、同感を得られたようで満足度が非常に高かった。うまくいかなかったことは、オンラインではあっても、ネット環境により、大学の 1 室に来ている学生もいたため、大学内がコロナワクチン接種会場となった際、急な全休講となってしまった。このタイミングがちょうど授業で重要な部分を実施することになっていたため、他の取組を考え実施するのに時間と労力を費やした。学生にとっても急な休講で集中が途切れたと思われ残念なことであった。
- ・ 2020 年度はやむを得ずの遠隔授業で苦労したが、日本語表現、文法等の基礎的内容（高校までの復習）に関する学習は、遠隔（オンデマンド）で何度も授業を聞けることや小テスト等で学習者自身も理解度を把握しやすいなど、メリットもあると感じた。LMS を活用した小テストは 2021 年度の對面授業でも継続して取り入れている。一方で、パソコンを使ったレポート作成については、学生の PC・ネットワーク環境に差があることもあり、對面授業でなければできないことが多かった。
- ・ 遠隔授業（オンデマンド）ではできるだけ主体的に取り組めるよう課題を工夫した。2020 年度前期後期は全面的に遠隔で授業をおこなった。突然初めて遠隔授業で、準備は大変だったが、創意工夫により課題を作っていく、それなりに手応えを感じた。学生の満足度も高かった。一方 2021 年度前期は對面と遠隔の組み合わせとなった。對面授業は感染対策を施した上でグループ作業中心におこなったが、やはり感染を恐れて思うようにできなかった。對面と遠隔の組み合わせもうまく行かず、教員も学生も満足な結果とならなかった。
- ・ これまでより、スライドや資料に説明を追加した
- ・ 大学の学びに馴染めないままの学生が多い。高校までの通学生活から、いきなりパソコンやスマホの動画になってしまい、プライベートで YouTube 動画を見るような感覚になってしまい、集中できないでいたようだった。そのため授業の中で投票にクリッカー、manaba のレスポンス機能を使って意見にいいねをつけさせる機会を多く取るなどしたが、時間を食ってしまうので、授業が進まずこまった。グループを組ませても、ブレイクアウトルームがお通夜のまま時間が終わるチームがでてしまうので、はなさざるを得ない設問作り、必ず全員に報告をださせるようにするなどの工夫はしたが、やはりこれも時間を食ってしまい、成功したとまでは言えなかった。
- ・ オンラインで外国語教育を行うのは限界がある。試験も不正行為を防ぎきれない。
- ・ とくに 2020 年度前期は、初年次学生の情報環境や IT スキルが把握されないまま講義が開始されたため、どのようなツールを用いたらよいか見当がつかず、結果としてテキストベースの講義を行わざるを得なかったが、結果的にはトラブルも少なく実施できた。
- ・ 遠隔授業では、チャットや投票、グループワーク（Zoom のブレイクアウトルームなど）で、参加している実感を持

たせるようにした。これはある程度うまくいったと考えているが、グループ内でのやりとりを全体として確認することができない、という点が問題であると思われた。

- ・ 工夫したこと：動画配信（YouTube）は10～15分程度のコンテンツを配信した。長い動画は飽きられるのではないかと思ったので。うまくいったこと：講義資料は、パワーポイントに音声を入れて行ったが、学生に評判は良かった。うまくいかなかった（と思われる）こと：参考リンクをLMS（学内 e-learning site）にアップしたが、あれもこれもと莫大な資料になった。しっかり見れてないと思う。
- ・ 2021年度後期が担当でしたが、対象学生は前期はクラスを2分割した対面授業でした。入学式の開催はなく、オリエンテーションも分割実施、実習は規模を縮小した本来の形式ではなく、本来であれば後期までに身につくスキルが十分でない状況での担当時間でした。授業設計時に想定する学生レディネスが把握しきれないまま、授業が始まりました。毎時間短時間でもグループ内でのディスカッションを実施したのですが、マスクで表情は目にできず、口元も見えず、本当にやりにくく、授業で目指す結果は得にくい状況でした。授業終了時に、オンラインで授業への意見を毎回送信してもらい、学生の状況把握と、次回へのつなぎを行いました。これは、授業担当教員にとっては、安心材料となりました。目で見える教室内の状況と、学生の学びの状況が必ずしも一致していないことがわかり、授業の達成目標に向かって進むことができた点が、うまくいったことだと思います。
- ・ 講義を自撮りして、Youtubeによって配信できるようにした。

問 21. 今回のコロナ禍を経て、今後、日本の初年次教育に、どのような変化（大学、授業、学生等）がもたらされるとお考えですか。ご自由にお書きください。（82件）

- ・ 従来からLMSを活用してきた大学では、初年次教育で行うべき内容・方法は大きく変化しないと考える。一方、学生の経験としては今後数年間、高校段階での基礎学力習得に地域・学校種での大きな格差があり、課題対応能力や基礎学力の格差をどのように充当するかが課題となるであろう。
- ・ WEB機能を有効に利用するスキルが教員に求められる。メールなどでの連絡のやりとりがさらに増え、教員は24時間学生からの連絡に悩まされることも考えられる。
- ・ 初年次に限らず、必ずしも「対面」でなければ、というわけではない。教員の負担軽減の為に遠隔で授業出来る方が理にかなう。
- ・ ポストコロナであっても遠隔での授業方法は変わっていかないであろう。対面授業になったとしても、コロナ以前よりもICTを使った授業が展開されていく。またこのパンデミックで学生は対面授業と遠隔授業の両方の質について敏感になっていると感じており、今後は両方の質が問われる時代になっていくのではないだろうか。そのような中、高大接続（入学前教育含む）がますます重要になってくると思われる。
- ・ 大学に来ることが必須でないことを明らかにした
- ・ 学力低下が一層進んだのではないかと、懸念しています。もしかしますと、成績のバブル化も発生しているかもしれません。
- ・ あまり変わらないと思う
- ・ まだよく分からない。
- ・ 初年次教育に限定してとらえることは難しい。ICT能力、経済格差、学力格差が一層深まる
- ・ 方法論についてのみ議論をしたり、対面での学修成果を事後的にアンケートなどから感覚的に評価するのではなく、大学の文脈に照らした教育目標やその到達度評価などが、冷静に求められるようになると思う。ある意味対面に上に学生に負荷がかかりやすい状況の中で、やってよカット思ってもらえる成長感を感じてもらう授業を行うこと

は、参加した臨場感を感じやすい対面授業よりも難しいと感じる。

- ・ オンライン教育のよい部分を、アフターコロナになったときに継続・発展させられるかどうかは、時間割配置の工夫、教室・インターネット回線等の整備など、大学の方針（オンライン教育を認める度合い、資源配分のあり方）によって左右されると思われる。そのような条件整備が可能な大学では、オンライン・デジタルツールを活用した多様な教育が提供できるようになるのではないかと。「ノート PC 持参・インターネット接続可能」を前提に授業設計できるようになるだけでも、課題の出し方・フィードバックの仕方の選択肢が広がるように思う。
- ・ トーク&チョークの時代は完全に終わった。ICT を有効に授業や学生指導に組み入れることで、学生の能動的な学びを引き出せる機会が増えていく。
- ・ 科目によっては、常時、オンラインで授業が行われるものも出てくるのではないかと。
- ・ オンラインを使つての授業の活用が増える
- ・ 大学生としての基礎力低下
- ・ 大学で学ぶことの意味を学生にどのように伝えるか、遠隔という新たな方法の中でどのようにそれを実現するかが大きな課題になっているのではないかと思います
- ・ ICT の推進が加速されるが、従来の教授法の利点も残すためにはハイブリッド型の授業が重要になってくると思う。
- ・ ICT をうまく利用して、授業ができるようになること。
- ・ 格差が広がると感じます
- ・ フールドワークと座学の並行実施などがしやすくなる。公欠などをオンデマンドで振り替えてなくせる。資格関連などのオンデマンド学習コンテンツが増える
- ・ 遠隔授業で実施する科目が増えるように思います。一方で、対面授業については、講義型の授業から双方向型の授業やグループ活動を取り入れた授業への変化が急速に進んでいくと思います。
- ・ 学生の能力として、オンライン上でのコミュニケーション能力や ICT を活用する能力は向上すると思います。その分、面と向かって人と話す機会を増やさないと、表面的なコミュニケーション能力だけに終わってしまう可能性があることを危惧しています。
- ・ 学ぶ側、教える側、教える環境のいずれであっても、オンラインに対応できる力を備えているということが教育現場・社会において当然とみなされること。教育を提供・教授する機会の拡大。教育を提供するための負担の増大。
- ・ 大学（特に大きな）は、対面講義と web 講義の両方を求められるようになるかもしれません。それに対応できるように、初年次教育の中に、web 講義の受講の仕方、コツなどを伝えるような、また、経験するようなコンテンツが含まれるかもしれませんね。初年次教育だけではないですが、コロナ禍で出題された課題が、対面に戻っても課されており、学生にとっては、コロナ禍前より課題量が増えているように思います。学ぶ力のある、対応力のある学生は問題ありませんが、ゆっくりでないと理解できない学生、発達障害の学生、また、アウトプットの苦手な学生にとっては、厳しい状況になっているように感じます。
- ・ 数年後には初等・中等教育でオンライン授業を経験した学生が入学してくるが、そうなる現在大学で実施しているような基礎的な PC スキルに関する授業は縮小できるかもしれない。またオンラインでのコラボレーションツールがもっと充実すれば、授業についてはかなり利用できると思われる。一方で「休み時間の再現」が出来ない限り、オンラインオンリーに移行するのは難しいと思う。
- ・ ハイブリッド型授業の拡大。2. 遠隔授業に対応できない学生の増加（新たな二極化）
- ・ 大学により、対面に戻る、対面とオンラインの併用などのばらつき、方針の違いが出てくると思います。
- ・ ようやく BYOD を前提とした教育が促進されると考えてます。
- ・ 活動に適した方法を選択する幅が広がったと思う。何でもかんでも対面にこだわる必要はないが、対面でなければできないことが、明確になったのではないかと。

- ・ 学生・大学とも遠隔授業を過大評価すると思われる。
- ・ 本学では従来オンライン配信等のインフラが整備されていなかったが、コロナ禍を契機に多様な授業が推進できるようになったことで、教員に要求されるレベルが上がりそう。
- ・ 初年次教育だけではないが、ICT を有効活用できる教員・学生がより求められるようになると思う。また、大学設備もパソコン関連機器・無線 LAN などの増強が必要になる。入学当初から情報機器が使えないと授業についていけないため、高校からパソコンや MS-Office 系アプリケーションに慣れておくことが必要で、それができない学生がいれば初年次教育のはじめの段階で、かなり短期間のうちにトレーニングさせることが求められるようになるだろう。
- ・ ICT 活用力の底上げを図る講義の開設。ICT の環境整備。ICT でできること、対面でできることの機能分類、テキストの再編成など。
- ・ 教員個人の IT 能力が強化され、多様な技術が使えるようになった。
- ・ 最初の友達づくり、大学での授業の受けかたや時間管理、など大学生活のスタートがうまくできない、という点で、対面授業が始まる頃には学習の遅れが出たり、大学に馴染めない、来ることができない、メンタル面で支障がある等の学生が増えているように感じる。
- ・ 今回の試練を単に負ととらえずポジティブに対応した大学の教育力が、コロナ禍終息後かなり上昇すると期待する。すなわち、オンラインとオフラインの上手な役割分担が整理されるのではないかと、というようなことです。
- ・ コロナ禍により、遠隔の導入効果と対面の再認識を意識しました。・遠隔導入により ICT スキルは当然となりましたが、仮にコロナ禍が収まっても ICT スキルの必要性は変わらないと思います。学生、教職員が取り残されることがないように、個々人の能力や自主性に依存することなく、組織としてしっかりとサポートをする必要があるのではないかと思います。初年次教育では、入学後の学びをスムーズにするために、入学前教育や入学後のオリエンテーションなどで ICT スキルの向上に積極的に取り組むべきだと思います。さらには、そうした初年次教育での学びをベースに、今後、高校学習指導要領改訂(情報科目)とも相まって、DX など社会から要請に対応できる人材育成は加速されると思います。・改めて対面でしかできないことは何かを考えるようになりました。グループワークはもちろんですが、対面の機会が限られている場合には、対面できる貴重な時間であることを再認識し、有効活用する必要があります。また、学生同士の人間的なつながりも大切だと思います。特に、初年次教育では、安心して、高校生から大学生へと脱皮できるように促す必要があると思います。
- ・ 一方向性であっても伝えるべき内容が中心となる授業内容と対面で実施すべき授業内容を明確にしたうえで、オンデマンド型の授業と工夫された授業課題設定による授業回、対面授業による授業回を明確にしたメリハリのある授業構成が必要になると考えます。
- ・ 大学は、学びから逃避することをせせと学ぶ場所となること。理解・認識・思考はそっちのけで、とにかく課題を出せばよいし、課題に答えさえすればよいことを達成すべきこととし、そのための技術（早送り動画で課題にふさわしい場所を発見する、課題を解くためにふさわしいところを資料に見つけるなど）が身につけていくこと。学ばないことを学んでいくという場所に大学がなりつつあること。野球で言えば、練習をすればするほど、練習をしないですむ技術を身につけていくということが行われている。学生の怠慢が問題ではなく、学生が学習している内容が「学ばない技術」であることが多いに問題だと考えている。これまで教室授業でもあったことが、一気に目立ったのだと思う。"
- ・ ICT の使用が加速するのはよいことであるが、学生間・学生と教員間でのコミュニケーションロスが問題として残るように思われる。
- ・ 反転授業を導入できる。
- ・ zoom をいつでも誰でも使えるようになり、学生同士で自主的に集まって話し合う機会と時間が大幅に増える（コロ

ナ禍以前はグループ全員で集まって課題に取り組むことは居住地やバイトの関係で難しかったし、LINE では限界があった)。②オンライン授業でさまざまな PowerPoint のスライドを目にすることで、自然と目が肥え、学生が自分でスライドを作る際に活用されることが期待できる。

- ・ オンライン（ビデオ会議システムや LMS 等）と対面とを、うまく活用させることができれば、効果的になるのではないかと考える。一方で、オンライン授業が多いと友人作りに苦労している学生が多く見受けられるので、「人間関係形成の場」としての初年次教育の役割が重要になってくるのではないかと考える。本学の場合であるが、高校時代に対面ばかりだった学生にとって、オンラインが多い大学の授業はすぐに対応できず、かつ大学で友人と接する機会も限られるので、勉学意欲を失う学生が多いように感じる（特に 2021 年度）。
- ・ コロナ禍で学生・教員双方の ICT リテラシーが上がり、また、ICT 活用の可能性も実感したことから、特に入学前教育の内容が変化するのではないかと思います。オンラインを活用した自主課題への取り組みや教員・他の入学予定者とコミュニケーションをとる課題の導入が可能となるため、入学時の準備状態を高めることができるようになります。また、入学後にも授業内外で ICT の活用が以前に比べて前提となってくるため、初年次教育の中にも ICT 対応の内容を盛り込む必要があるかと思います。これらの初年次教育を効果的に行うためには、入学者が高校までにどのような ICT 教育を受けてきたかが重要となるため、ICT 能力や活用に関する高大接続も新たな課題となると思われます。
- ・ オンラインと対面のハイブリッド化が進む。
- ・ より一層、初年次教育における「学生の交流」・「課外活動を含めた学習」といった機能において、期待が増えると思います。また、学習の仕方が、変化する中においても、初年次教育における「学習方法・学び方」について、その機能が一層、期待されると思います。これから、ますます、初年次教育のあり方において、注目されるべきテーマが増えていくと感じました。
- ・ 情報教育が今まで以上に重要になると思われる。
- ・ 対面とオンラインを組み合わせたより効果的な学びができるようになると思う。
- ・ 大学における「学びの形態」が、ビフォー・コロナとアフター・コロナでは大きく変化したことによって、学生の「学びの質」も変容するであろう。これまで、初年次教育を経て、卒業時に身につけていることが当たり前と考えられていた「汎用的能力」が十分でないことも予測されるし、あるいは、逆に、オンライン授業になったからこそ、新たに身についた「汎用的能力」もあると予測される。初年次教育における学びでは、従来どおり、個人に関する学習スキルを育成するのももちろんであるが、コロナ禍を経て、自分の居場所を確保するスキル、人間関係構築スキルなど、個人一団の切替を行いながら、社会で生きてくためのスキルを育成する必要があるであろう。人間関係の構築などは、現代では、人間関係を構築するための学習環境、すなわち「協働学習」などの学びをとおして、「個別最適性」「個人同士の協働」がよりいっそう重視されるようになるであろうと考える。初年次教育に限らず、授業に関しては、今後のコロナ禍の状況にもよるが、オンライン授業と対面授業の混合型によるハイフレックス型の授業が、これからの大学教育の授業形態のスタンダードになり得る可能性がある。対面型の授業、オンデマンド型の授業よりもハイフレックス型の授業形態が、今回のコロナ禍で、自分たちの好む学びの形態や学習スタイルと合致していると学生達に認知されるようになってきたことが理由である。ハイフレックス型授業は、好む・好まざるに関わらず、学生達にはそれほど、かなりインパクトがあった。今まで日本の大学では、通信制大学や放送大学を除いて、普通に存在し得なかった授業形態が、突如して普通に出現したからである。
- ・ 初年次教育の目指すものは変わらない（いや、もしかしたらリモートに必要な知識や、参加のスキル、メールを出す場合の基本的な方法などが必要かもしれない）が、授業方法は大きく変化した。従来の空間の共有はなくなり、環境を整えば場所を選ばないし、場合によっては時間も選ばなくなる。従来の方法でやりにくさを感じていた学生の中にはリモートになってよかったと反応している。ますます様々な方法により学習効果を上げていくには、教

員側のさらなる工夫や、根拠に基づいた教育方法の実践が問われると感じている。が、なかなかクリエイティブな方法が見つからず模索しているのも現状である。

- ・ アクティブ・ラーニングとは何かについて、従来議論されてきたことに変化が出るのではないのでしょうか。学生自身の学修上、何が起きるとよいのか、学生の学修の何を捉えてそれを評価できるのかなど、これまでの理解が対面／非対面の授業ごとに場合分けされるかもしれません。大学はハイブリッド型授業を推奨してはいますが、私の場合は、対面の授業より非対面の方が授業の質が落ちた実感がありますので、あまり評価できていません。そういう教員からの建設的な批判は、大学の方向性にも影響すると思います。
- ・ 大学授業で特に初学者&初年次学生向けに、基礎力を向上させるのには、効果的と思う。
- ・ 学生にとっては、学力低下は避けられないので、臨地実習等の資格系の教育体制は文科省、厚生省がフレキシブルな対応が必要と思う。」
- ・ オンラインの環境では、学生同士の授業時間外の相互作用がどうしても希薄になり、課外の時間も含めて学び合うことが難しいと言えます。しかし、学生も教員も、オンライン授業の良さも体験しているため、コロナ禍が落ち着いた後も、オンライン授業は一定数、継続されると考えます。その場合に、学生同士のインタラクション、特に、出会いの段階を活性化する手立てがますます重要になると考えます。
- ・ 学生：他者との協働に対して不安感を持つ人が増える、授業：アカデミックスキル習得にける時間が増加する、大学：ハイブリッド形式の恒久的な使用・動画などを活用したアウトソーシング（外部委託）、教員：自分の存在意義を差別化できないと生き残りが難しくなる
- ・ 通常の対面授業の中で Google の Classroom などのプラットフォームを利用した学習指導を組み込むという方法によって、対面・遠隔の双方の利点を統合した授業形態が一般化する。
- ・ IT リテラシー・数理リテラシー重視、②LMS 活用による時間外学修課題の管理、③自律的学修者育成
- ・ PC スキルの向上
- ・ 初年次教育では無理をしても対面教育が必要である。
- ・ 講義形式の科目では、zoom や teams などの ICT を用いた授業が増え、実験・実習系科目では、対面とオンデマンド・オンラインとが併用される授業が増えると考える。
- ・ 動画講義の実施により、すべての科目で課題を出すことが当たり前となった。そのため、対面講義に戻っても、学生の負担がコロナ禍以前より増えているように感じる。能力の高い学生にとってはより良い学びにつながっている。一方、能力の低い学生にとっては課題が多すぎてアップアップしているようである。
- ・ 学生の学習意欲が高まり、特に自律学習を促すという面では良い影響をもたらした。レポートの書き方などスキルを習得する授業では、授業動画を通常授業に取り込むことで反転学習が可能となり、対面授業では課題のフィードバックや実践的な指導に時間と労力を割くことが可能となる。学生側も、反転学習により学習目的や各授業の要点がより明確に理解できると思われる。
- ・ ICT 技術の積極的活用そのものは従来にない学びの内容充実をもたらしてもくれている。ただ、あらためて、学生のキャンパス生活の大切さ、かけがえのなさも実感している。対面ベースで遠隔技術を併用したメリハリをつけた初年次教育を実施すれば、よりよいかたちはありえると思う（初年次教育に限らないが）。
- ・ 本質的に大きな変化があるとはあまり考えていません。授業の運用的な面では、より柔軟な対応が可能になる道筋が見えたかと思います。
- ・ 授業に限らず遠隔と対面の組み合わせは初年次学生にとって有効であると考えました。SNS の隆盛から 10 年ほど経ちますが、入学前の学生が SNS を通じて知り合い、対面で会った時に打ち解けやすくなるという流れは続いています。初年次教育においても、遠隔での繋がりを強化して、対面授業に活かすという方法が有効だと考えます。
- ・ コロナにより、さまざまな先生方の授業の実態を知ることが出来たのは思わぬ副産物だったが、正直、授業内容や

質はピンキリであることが改めて分かった。特に遠隔は明らかな手抜きもあれば素晴らしく作り込んだものもあった。遠隔にせよ対面にせよ、これからは授業の質自体を上げていく必要があると痛感した。

- ・ 個々を把握できる IT システムの開発が必要
- ・ キャンパス内で時間を過ごせば自ずと得られる帰属感や仲間づくりなどがコロナ禍で制限されるなか、初年次教育の持つ意義がますます重要なものに思える。
- ・ 少人数授業が実施されるようになる
- ・ 初年次教育において、オンラインであっても、対面同様となるような授業内容の工夫が行われることが必要。学生同士のコミュニケーションの場を低学年から身につけないとその後の年次、その他の専門教育への繋がりが構築されにくい。また友人関係やスキルだけでなく、学業にも影響が出る。今回のコロナ禍でのオンラインのメリットをうまく活用し、今後しっかりとした初年次教育確立を各大学で行う必要があると考える。
- ・ 数年後には中高でタブレット・PC 等を活用した授業に慣れている学生が入学してくることになり、今よりも遠隔授業等の活用はしやすくなるのではと考えている。
- ・ 教員（そして学生も）遠隔授業に慣れ、環境(LMS の導入など) もかなり整備されたので、授業実施形態に幅ができたと言える。遠隔を活用した反転授業などうまく使えば効果的な教育ができるのではないかと。
- ・ 個別指導の重要性が増す
- ・ 高大接続（移行）の重要性は高まると思う。その意味で、初年次教育の重要性も高くなる。ICT 関連、機器の使用方法などについての、初年次教育での指導の必要性も高まると思う。通学することに対し、学生の要望が二極化しているように思うので、通信制大学への関心も高まる可能性がある。学びの形が多様化すると、初年次教育ですべきことも多様化してくるだろうと思う。
- ・ アクティブ・ラーニングを積極的に行うことができなくなるであろう。
- ・ 今まで以上に入学前教育の位置づけが重要になると考える。
- ・ 第一に、ICT 活用の拡大が考えられる。遠隔やオンデマンドでできることはそちらで、という風潮が強まるのではないかと。
- ・ オンライン型学習を要望する学生に対して、形式的な講義の対応はできるようになった。しかし、その学習効果やキャリア教育（就職支援）における効用度（感）は未知数である。社会人基礎力等がしめす「対人関係スキル」を身に付けるには、実習・演習系の授業なくしては厳しいと思う。今後は、初等中等教育において不登校やフリースクール型学習を経験した生徒が、高等教育に進学するケースが増えると予想される。対面型とオンライン型のハイブリッド型授業のモデルケース（評価規準も含めた）が求められていると考える。
- ・ 日本中が通信制大学のようになっているんだなあ、と感じていました。黙々と知識を得るだけの目的ではない大学なので、学生が考えて教員とやり取りすることは、今の自身の考えに刺激が加わり、新しい考えに発展する、あるいは再考する、など、期待されることから、やはり対面で双方向の授業をしたいし、する必要があると強く思いました。人と人が対面することができなくなったら、高校生が円滑に大学生になる必要性もなくなるのではないかと、各々の大学が目指す学生像も大きく変更しなくてはいけない世の中になるのではないかと、と危機感を覚えました。
- ・ 座学で学べることについては、動画講義が普及するのではないだろうか。課題採点に時間を多くとれるので、学生の質問に深く答えることができるようになる。他方で、グループワークは対面で行う方が教育効果が高い。教室に来た時は、なるべく学生間のコミュニケーションに時間を割いた方がよい。今後、初年次教育は自宅での予習と、教室でのグループ活動の組み合わせというスタイルが変わっていくのではないだろうか。

ご協力ありがとうございました。